

研究

嘉永七丑年（安政元年）の地震記録

福泊浦・臼杵・府内の記録から

吉田 勝 重

（会員 佐伯市女島）

（一）はじめに

今回紹介する古文書は「福泊浦記録―嘉永六丑歳九月より」である。嘉永七年（安政元年・一八五四）の十一月五日に発生した安政大地震の記録である。

安政の大地震については会誌二一七号で濱田平土氏が「村の古文書」と「宝永四年・安政元年の大地震と大津波」と題し色利浦文書を紹介している。今回はその同じ地震を福泊浦記録、佐伯郡方町方御用日記、稲葉家安政史捷、府内藩記録から検証してみたいと思う。

嘉永七年の十一月五日に発生した大地震は中小地震を発生させながら安政三年（一八五六）の秋まで続き収束している。この年の十一月二十七日（十二月二十八日）に安

政元年と改元されている。

では、まず福泊浦の記録を紹介してみよう。

この福泊浦の記録は代々の福泊浦庄屋が地域内外で起こった出来事を記録した冊子で嘉永六年（一八五三）に当時の庄屋「覚助」よって書き始められたものである。

（二）福泊浦の記録から



《読み下し文》

嘉永六丑年九月より 記録 福泊浦役中

《訳 文》

嘉永六年（一八五三年）丑年九月より

福泊浦の記録 福泊浦役中



《読み下し文》

記

大地震の事

嘉永七申寅年十一月五日より十五日までの大変事なり
十一月五日晩七ツ半時分過ぎとおほしき頃大地震入
る、誠に古来稀こらいまれなるゆり様也。尤も、そのゆり様長く
ゆり、又それより夜にも中小地震数々入り、右につき痛
みの次第、當浦は御高札ヶ所ゆりつぶし、その外は別
条これ無く、御城下町内大そふなる痛み、家・蔵・壁ゆ
りおとし、家つぶれたるも数々有り、殊ことに言語にも申し
難き事なり。それより此の奥、内浦々は土蔵は段々かべ
ゆり落し候えども家々には別段痛みこれ無く候、又夜

五ツ前頃、御城下には津浪打ち入り、塩浜土手数所せり
切れ、土手より内は山ねまで平らの海になり、中村土手
より外は新地残らず平らの海になり、奥は藤原川まで
打ち込みたと申され候。その津浪、海邊當浦までには
暮れ六ツ過頃より五ツ時分頃までは塩大しおそふ満みちると
見れば直ぐに大そふひるなり。

《訳文》

記

大地震の事

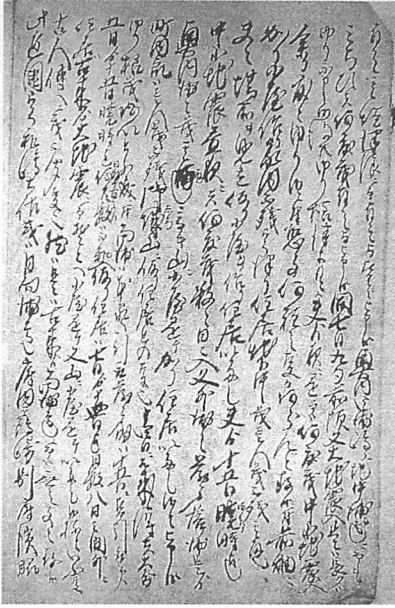
嘉永七申寅年(安政元年)十一月五日より十五日までの
大変事のことである。

十一月五日晩七ツ半時分過ぎと思われる頃 大地震が
あった。誠に古来稀こらいまれなる揺れかたである。もつとも、そ
の揺れさまは非常に長く揺れた。それより夜にも中小地
震がしばしば感じられた。右の地震で被害を受けた所は
次の通りである。

當浦、福泊浦は高札こうさき一ヶ所が揺れつぶれ、その他は別
条なかつた。御城下の町内は大層な被害であつた。家、蔵、
壁は地震で揺り落とされ、つぶれた家も数々あり、誠に言
語に申し難き事であつた。それより此の奥、内浦々の土蔵

は段々と壁がゆり落しにあつていた。家々には別段の被害はなかつた。

また、夜五ツ前頃御城下には津浪打ち入り潮が浜土手数ヶ所をせつ切り、土手の内側は山根まで平らの海になり、中村の土手より外の新地は残らず平らの海になり奥は藤原川まで津浪が打ち込んだと申していた。その津浪は海辺の当浦あたりでは、暮六ツ過ぎ頃より五ツ時分頃までは潮が大層満ち、満ちると見れば直に大層干した。



《読み下し文》

其の通り何度もこれ有り、其の塩津浪にてこれ有りとは皆々申し候。奥内の四浦・嶋ノ地・中浦までにても、満ちひは何度もこれありと申され候。同七日九ツ前頃、又大地震入り、これは長くはゆり申さず候えども、ゆり様強く候。それより夜にかけては、何度も中小地震入り、余り度々ゆり候につき、恐しき事何程の事かあらんと存じ候につき、前畑にかり小屋作り、家内残らずうつり住居、地下中も老人も残らず其の通り。それぞれ場所を見立てかり小屋を作り住居いたし、それより十五日暁時まで中小地震、昼夜には何度も数々日に入り、又外浦々浦戸・落ノ浦、是より奥内浦々もその通り、高き山に小屋かけて、かり住居いたし候と申され候。町内衆は老人も残らず、御城山にかり住居との事なり。十四日に相なり候えば、大分ゆり様も恐いとならずにつき、当浦は本家へ引き取り、蒲戸浦は十五日に皆引き取り申され候。

五日より十五日暁時まで日数十一日の間、何とも数は知らず入る。かり住居は七日より十四日まで日数八日の間、外に住居は古来より大地震にて外へ小屋かけ、又山に小屋かけいたし候などといふ事、古人傳へにも聞かざる事

なり。然しかはこれらはは古来より当浦辺にてはこれ無き事と存じ候

《訳 文》

その通りの津浪が何度もあつた。その潮を津浪だとみんなが申していた。奥内の四浦（四浦半島・嶋ノ地・中浦辺までも満みちち千ちひは何度もあつたと申していた。

十一月七日九ツ前頃また大地震があつた。この地震は長くはゆれ無かつたけれど揺れ方が強かつた。それより夜にかけては何度も中小地震があつた。余り度々揺れるので何か恐しき事があるのではと想い、前の畑に仮小屋を作り家内残らず移り住んだ。地下中ちげちゅうも一人残らずその通りにした。それぞれ場所を見立て仮小屋を作りすまいした。

それより十五日暁時まで中小地震があつた。昼夜に限らず何度も数日にわたり地震があつた。また外浦は、浦戸うちのうら、落ノ浦おちのうら更にこれより奥内の浦々もその通り仮小屋を作り住居とした。高き山に小屋をかけ仮の住居にしたと言つていた。

町内（藩内）の家は一人残らず、御城山に仮住居を作つたとの事、十四日になると大分ゆり様も恐しいと思わな

くなり、福泊浦では仮小屋から本家へ引き取り、蒲戸浦でも十五日には皆仮小屋から本家へ引き取つたと言う。五日より十五日暁時までの日数十一日の間、何回か数はわからないほど地震があつた。仮り住居は七日より十四日まで八日間住んでいた。古来より大地震にて外へ小屋かけしたり、又は山に小屋かけしたりしたという事は古人より傳へ聞く事もあつたが、今回の地震のように仮小屋を造つた事は、古来より當浦邊とうらべには無いと存じている。

この福泊浦の記録には、福泊の被害として「當浦、福泊浦は高札一ヶ所が揺れつづれ、その他は別条なかつた。」と書かれている。しかし、佐伯の御城下、町内（船頭町や内町等）は大層な被害であつたとある。

（三）嘉永七年寅年 御用日記

「嘉永七甲寅年御用日記 七月の十二月追御番頭」によると地震当日の様子が次のように書かれている。

一 昨四日朝五ツ半頃軽き地震致し、沖合汐不段ふだんちひき満引みに有らず。不穩の趣の處さる今夕申の中刻大地震、沖合高波にて市中人氣不穩候に付、先年の御當りをもつて

津浪相因^{あひす}の爲大筒持せ、蟹田坂中村外へ小頭^{こがしら}ならびに足輕共差遣^{さしつかせ}人氣相鎮^{じんき}申すべき哉と儀右衛門へ申し達し候處、其の通り申聞候に付 火の廻りの面々ならびに手附見廻方足輕共市中立廻候様申付候

一 萬一 此上大地震津浪等有り候はば 宝永四亥年の御當りをもつて大手搦御門開き御家中ならびに市中の者共立退候はば御城内へ入れ申すべき哉と儀右衛門へ申達候處 其の通り申し聞せ候に付 夫々へ申し渡し候

一 申の下刻 俄に高汐、川内に入れ込み榘^{ますがた}方大土手外水一面に相成り市中大いに騒動致し御城内且御城山最前へ皆々逃登^{にげのぼ} 人氣恐怖致し候に付 私共始別詰御役人共早速川筋へ罷越し見分^{けんぶん}致し候處 汐折々急満引有り段々地震致し益騒立候故儀右衛門始何茂^{なれも}火事装束にて會所へ出座御城門御締等夫々申し付猶又町奉行共市中相廻り夫々差図及び候 夜中も軽き地震相止ず御家中ならびに市中の者共終夜山ノ手に罷在り候に付 足輕共数人立廻らせ火ノ元別して入念候様儀右衛門申聞候に付 夫々へ申渡候

この文書により今回の地震の対策として宝永大地震の際の手だてを踏襲し、津波がおし寄せた場合の合図に大筒を持たせている事、避難対策として搦手御門を開け人々を山の手に入れるようにした事、市中の人々の不安を解消させる為見廻りとして足輕や別詰めの役人を向かわせたりしている事。火事装束に身を固めて臨機応變の対応をしている事が確認できた。

引き続き **福泊浦の記録** を見てみよう。

(四) 福泊浦記録



《読み下し文》

此近国 宇和嶋、土佐あるいは日向浦邊うららべ 府内みなと、鶴崎、別府・浜脇・臼杵御城下内 此の国々も大そふ成痛なるみこれ有りはなしうけたまわと咄二承り候 津浪も大そふ打 段々家をあらいだし候と承り候 尤も時は此辺も違えず、一ツ時と申され候と承り候、府内御城下・鶴崎町は居宅から残らずゆりつぶし候と申され候 それにくらぶれば 此御城下内は三步さふいち一てもこれ無しと 府内辺より帰り候者申され候。五日晚より十五日の間、一日に地震昼夜に懸り 四ツ五ツ入らざる日はこれ無く、尤も、大地震は五日七日、しかし十日時分よりは大分かろくなり、十五日までには次第次第にかろくなり、七日大地震に津浪少しもなし、これに依り大地震入りたる後では、小地震日々入ものかとは存ぜられ候。古来より傳えにも、大地震入る後しばらくの日は小地震入るものと傳え聞く候なり、八日の間外へ小屋作り住居すまい。同廿四日夜四ツ過頃より大雨振り出し大まじなり、同廿五日晚時頃まじ、大そふつよき大雨大沖なりなる浪、大そふふとし 古来稀なるおおしけなり。六つ過ぎ頃よりまじなぐ。雨あがり水大そふ出る。寒中には古いにしへよりこれ無き事と老人ども申され候。浪は夜

よりへる。尤も、右地震十五日より廿五日までも小地震昼夜共に数々入る。五日より二十五日まで日数二十一日の間 日々入るなり。

《訳 文》

此の近国宇和嶋、土佐あるいは日向の浦邊、府内、鶴崎、別府・浜脇、臼杵御城下内 此の国々も大層な被害があったと話にうけたまわった。津浪も大層打ち寄せ、段々に家をあらいたしたと聞いた。もつとも 時は此辺も違わず同じ時間であつた

聞くところによると、府内御城下・鶴崎町は居宅、藏残らずゆりつぶされたと聞いた。その事に比べれば 此御城下内の被害は三分の一にも無しと府内辺より帰ってきた者が申していた。五日晚より十五日の間は、一日に地震が昼夜を問わず四五回あり、地震の無い日は無かつた。もつとも大地震は五日、七日だけだつた。

しかし、十日時分より地震の揺れ方も大分軽くなり、十五日までには次第次第に軽くなり、七日の大地震には津浪もなかつた。大地震が起こつたあとは小地震が日々あつたと思われる。

古来よりの傳えにも大地震の後、しばらくの日は小

地震があると聞いている。八日の間外へ小屋を作り住居していた。同二十四日夜四ツ過頃より大雨降りだした。大まじなり。同二十五日暁時頃まじ 大そう強い大雨。大沖なり。浪大層太く古来稀れなる大しけであつた。六つ過頃よりまじがないだ。雨あがり、水大層出る。寒中に古よりこれに類するような大時化しけは無いと老人たちが言つていた。浪は夜より減つた。もつとも右地震十五日より二十五日まで小地震 昼夜共に数々あり 五日より二十五日まで、日数二十一日の間 日々地震があつた。

このように福泊浦の記録には、まわりの様子が聞き書きとして記されている。この地震の様子を臼杵藩古史捷（安政古史捷）や嘉永七年寅年日記下、府内藩記録ではどのように綴られているか調べてみた。

(五) 臼杵藩記録

《臼杵藩古史捷（安政古史捷）》

一嘉永七寅年十一月五日申ノ半刻過大地震、無程ほどなく洪波打は寄其後折々地震之處、同七日辰ノ半刻又候大地震にてあつた。壓死あつた潰家損所等左之通御座候

一潰家つぶれ式百八拾貳軒

一半同七百四軒

一山谷崖崩やまたがけ三百八十ヶ所、

一田畑潰并しおわし汐押等十九町七反四畝半

一往還道崩四拾貳ヶ所、橋落三ヶ所、

一川除土手落貳拾七ヶ所とある。

別の「稲葉家日記（嘉永七年寅年日記下）」には

五日、晴 申半刻過大地震

一今申ノ半刻過ぎ地震一方ならず大動おどろ 御城下所々御破損所これ有り、御城下方々大破につき両月番何れも追々登場。慶昌院様（稲葉公御母堂）へは御内所御花畑へ御成り御座候に付、何れも罷り出で御機嫌相向う、御用人相代わり合あひつひ相詰める。程なく沖鳴動洪波打ち寄せ、辻井戸ノ邊等打揚げ、御掘かから桂石等打返し道洗こうはし崩し、大手御門内外も汐込入り、祇園洲過半同様、地低し場所は通路出来難く、右に付き御門内住居し面々家内迫御城下へ立退き、御門外海辺之類は地高し場所堂宮畑へ駆登り、其後も沖鳴動し潮差引警々、震り不穩一統騒動、其處食事等難法に付御城下の分へ握飯粥等御救臺所へ下し置かれ、且又、酒家等て炊き出し申付候

臼杵藩の資料には城中の被害状況や地震に対し城の内に逃げ込んだ事やお助け小屋などの設置が書かれている。他には福泊浦同様仮小屋を作った事も記されていた。

(六) 府内藩記録

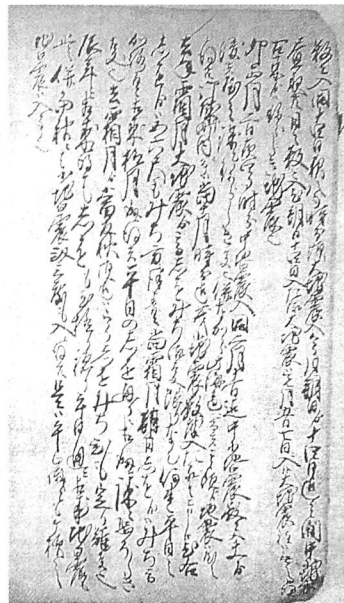
府内藩記録（安政三年五月に地震の事を江戸に届け幕府に借金を願った文書）には次のように書かれていた。

私領分豊後国府内去る十一月四日、五日、同七日未曾有の大地震に付、其節御届申し上げ候通り、居城内外始め家中町郷共破損夥敷潰家又は大破、死失怪我人等多分有り、殊更城内の儀は櫓多門数箇所潰れ、其餘其傾修復も相成難し、大破にて壱箇所も無事な櫓無し、石垣土居数拾箇所抜け、崩れ、孕み出、城郭内外諸番所柵向け、私住居悉く相潰れ申し候、且又郷中の儀も郷莊を始め民家多分相潰れ、山崩れ田畑破裂泥砂吹き出し地面落窪み、荒水荒れの場所少なからず、用水井堰堤など右山崩れにて土砂大石大木落込み候處も数方所有之道橋崩れ落ちなど、暫時も其のまま差し置き難く、猶又家中ならびに領中の者差し留め雨露相凌ぎ手當取りあえず申付候えども、勝手向き從來不如意の上近年別して臨時

物入り打ち続き必至と差支難渋至極……とある。

これにより地震のすぎまじさ、湧水現象や地盤沈下のあった事がわかる。福泊浦のその後の様子は続きの記録に次のように書かれている。

(七) 福泊浦記録



《読み下し文》

十二月朔日晚七つ過頃大地震入る 先月二十五日より朔日までの間 昼夜共中小地震数々入り 同十四日夜八ツ時分頃大地震入る 今月朔日より十四日までの間中小地震、昼夜共日々数々入る 尤も 朔日、十四日入りたる

大地震は 先月五日七日に入り候大地震程はこれ無く候えども古来よりは珍しき地震なり。

卯の正月二日夜四ツ時分、中地震入り同二月十一日間で中小地震数々入り、それより後は止み 誠に珍らしき事なり。しかしながら此の海辺にては、その頃より地震は止候えども、御城下町内にては当十月時分までも小地震数度入りたると申され候。尤も、右、去年霜月大地震より高潮満ちる事限りなし。いづれ平日の潮よりは五・六尺も満ち方強く、当霜月朔日潮よりは満ち方かく相なり極月なり候えば平日の潮通りに相なり 誠に恐ろしき事なり。去る霜月より当夏・秋頃までは潮みちひも定まり難き事なり。辰年に相なり候えば、潮も至極く穏り、平日通りに相なり、地震も止み 併し、当秋には小地震式・三度も入り候えども、これは平正俄にもケ様の地震は入る事なり。

《訳 文》

十二月朔日晚七つ過頃大地震があつた。先月二十五日より朔日までの間 昼夜共に中小地震が数々あつた。同十四日夜八ツ時分頃大地震あり。今月朔日より十四日までの間中小地震昼夜共日々数々ある。もつとも朔日、十四

日に起きた大地震は 先月五日、七日に起きた大地震程ではなかつたが、古来より伝えられている地震と比べても珍らしい程の大きな地震であつた。

卯年(安政二年一八五五)正月二日夜四ツ時分中地震があつた。同二月十一日まで中小地震が数々ある。それより後は地震がなかつた。誠に珍らしき事である。

しかしながら、この海辺にては二月十一日頃より地震は起こらなくなつたが 御城下町内にては 当十月時分までも小地震が数度にわたり発生したと言つていた。

もつとも右地震の時は、去年の旧曆十一月の大地震の高潮のように満ちる事はなかつた。いづれも平日の潮よりは五六尺もみち方が強かつた。旧曆の十一月朔日潮よりはみち方も軽くなり 旧曆の十二月になつた頃は、平日の潮の通りになつた。誠に恐ろしき事である。去霜月より当夏・秋頃までは潮の満ち引きも定まり難き事であつた。(安政元年から安政二年の秋頃まで安定せず)

辰年(安政三年一八五六年)になると潮も至極くおだやかに平日通りに、地震も止んだ。今年の秋(安政三年)には小地震が二、三度あつたけれども、これは平正の時に俄に起こる地震のようなものである。このような地

震は時々起きる事でもある。

このように福泊浦記録には地震が次第に沈静化していった事が記されている。

(八) 安政元寅年 郡方町方御用日記

この安政の地震について佐伯藩が他にとどのような対策をしたか、詳しい被害状況がわかる文書「安政元寅年・郡方町方御用日記(御郡代町奉行公事方)」も残されている。そのいくつかを抜粋紹介する。

- ・ 俄に泥水滴る。急流にて朔月望月(一日十五日)の潮位に満ち甚だ塩辛かった。すぐに川筋の底が見える位に引いた。都合三度来た。
- ・ 居家土蔵等崩れ、家、壁等破損数多く有り
- ・ 諸木方前、往来筋(現広小路付近) 深さ貳尺五寸程泥水上がる、都合八度……地震十一、二度程……
- ・ 向ノ嶋(現中の島付近) 田畑、諸木方近辺も兩三度汐込(津浪) になり……
- ・ 御家老中始め御役の火事仕度(火事装束) にて登城
- ・ 小頭山崎四郎治へ御武具方附一人差し添え五貫目筒

矢風一挺持ち松ヶ鼻へ出張、もし津浪打ち寄せ候はば知らせの為、無玉にて打ち候様申し付けらる。

・ 當役御目付、内河筋(大手前付近)、諸木方前住吉辺、船頭町川筋立ち廻り……

・ 山際、御米倉前において御家中、下方ならびに町方の者共御救米炊き遣し、御賄おき候。銘々家内人数高書付持参の上、頂戴致し候。忝人前飯椀もつそう一つ、沢庵漬大根切添え一日兩度下し置き候。

・ 異変の儀、江戸表へ御知らせの御用状、中国路にて森小倉、梶西組重兵衛、長溝組藤七差し遣し候

・ 両社(大明神Ⅱ五所明神、若宮八幡)、大日寺不動において、地震静謐の御祈祷十七日の間申付候

・ 御城下ならびに市中、火の廻りの面々昼夜別なく入念相廻り候

このようにお救い小屋の設置や炊き出し、市中見廻り等に精出している。祈祷場所はこの他に愛宕社、龍護寺、龍護寺観音、尺間宮大社等がある。小浦、蒲江、大島等の番所からの被害状況も知らされている。